

毛主席の誕生日に（異文化言い分EVEN）

著者	山田 七絵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	213
ページ	40-40
発行年	2013-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003697

毛主席の誕生日に

山田七絵

中国の職場では、来客の接待、誕生日や昇進祝いなど何かと理由をつけて親しい人同士で食事をする機会が多い。時には外国人には耳慣れない記念日に人々が集まることもある。そのひとつが、一月二十六日の毛沢東の誕生日である。一部の都市地域を除きまだそれほどクリスマスを祝う習慣にとってこの日はクリスマスよりよほど深く記憶に焼きついた日付である。二〇〇八年のその日、私は客員研究員として滞在していた北京の研究所の同僚に「今日は毛沢東の誕生日なので皆で食事をするが、来ないか」と誘われた。私にはこの集まりの趣旨がピンと来なかったが、面白そうなので行くことにした。なお、現在この日は祝日ではないが各地で記念イベントが開催されている。

場所は研究所内にある、来客時によく使うレストランの個室だった。同じ専攻の仲の良い研究員が数人集まっており、私を誘った四〇代のX先生以外に五〇代と思しきS先生、三〇代前半のS先生など、数人が集まっていた。酒が進むと年長のL先生、X先生がしみじみと毛沢東時代の思い出を語り始めた。特に記憶に残っているのが、毛主席の命日（一九七六年九月九日）に二人がどこで何をしていたか、という話である。

X先生は当時吉林省の農村に住む小学生だった。農村の

家々には毛沢東の写真が飾られており、訃報を聞くと大人たちは大声をあげて泣いた。学校では連日追悼集会が開催され、授業はなかった。「毛主席なくして中国に明日はない」と教え込まれていたX先生も、将来への不安にさいなまれた。一方、当時上海で大学に通っていたL先生の反応は全く異なっていた。彼は上海で最新流行のファッション、つまり長めの髪に革ジャン、ベルボトムに身を包み、普及してきたばかりの自転車にラジオをぶら下げ、テレサ・テンを聴きながら颯爽と街を走りぬけていた。計画経済時代とはいえ、中国随一の大都会にいたL先生は訃報に触れても「あ、そう」といった程度の感想しかもたなかったという。

当時の中国は都市と農村が制度的に分断されており、農村は都市経済、工業化を支えるための食糧供給基地と位置付けられていた。人の移動も厳しく制限されており、外国との交流もほぼ断絶していた。農業集団化の失敗により農村経済は疲弊し、非常に貧しかったといわれる。農村出身者が他の地域へ移動するには、軍隊に入るか進学するなどして都市で職を得る以外ルートはなかった。現在でも中国の地域間の経済格差は大きい。当時は生まれた場所によって一生の大部分が決まるといつても過言ではなかったのである。

周知のごとく改革開放後の中国は急速な経済発展を遂げ、体制の変化は多くの人に新しい機会をもたらした。関連して、国内外でヒット作を続々と発表している映画監督の馮小剛による「公平さについて（原語は『關於公平』』という中国版ツイッターの投稿を紹介したい。

「私は『機会』は公平に与えられるべきだが、『結果』の平等を求めてはならないと思う。私は映画

学院どころか大学すら出ていない。昔なら映画学院を卒業せずに映画監督になりたいなんて、せいぜい酔っ払いの戯言に過ぎなかった。幸い改革期に巡り合わせ、映画界は門戸を開き私にメガホンをとる機会を与えてくれた。これは『機会』の平等である。一方で私は『結果』の平等は決して望まない。仮に二人の職人がいたら、良い仕事をした方が飯にありつけるのは当然だ。腕が良い者こそでない者、働き者と怠け者がパンを半分ずつに分け合う、これこそ『不公平』じゃないか？」

この投稿はネットユーザーから喝采を浴びた。中国社会にはコネや汚職などの不条理が蔓延していることがしばしば指摘される。だが一方で、馮監督のように与えられた機会に一心に応えようとする人々があり、彼らの能力と努力を率直に評価する土壌も確かに存在していることを見落としてはならない。人々の豊かさへの情熱と努力が中国経済をここまで発展させたことは間違いないだろう。とはいえ、もし毛沢東が現在のやや極端な競争社会と広がり続ける格差を見たら、一体何と言うだろうか。

冒頭の話に戻る。宴も終わりに近づいたころ、X先生は東北人特有の豪快で明るい調子で以下のように話を締めくくった。「あの頃私たちは社会主義で世界中の貧しい人々を救える」と信じていたけど、実は自分達が世界で最も貧しいという事実を知らなかったのよね。L先生も、当時まだ生まれていなかったS先生と私も、一緒に笑った。三十数年前の毛主席の命日には、二人ともこの日のことについて笑い合える時代が来るとは思っていなかったに違いない。しかも外国人の私と一緒に、食卓を囲みながら。